

(様式1)

「未来の担い手育成プログラム研究指定校」実績報告書 (3年次)

## 1 学校名等

学 校 名	京丹波町立瑞穂中学校				校長名	武永 吉弘
研 究 主 題	未来を創造することを目指した「主体的・対話的で深い学び」の実現 ～課題解決型学習を活用した、地域の未来を考え、行動できる生徒の育成～					
研究の目的	激しく変化するこれからの社会では、新たな課題に対して既習の知識を活用すること(認知能力)、課題解決に向けて総合的な思考力・判断力・表現力を育成すること(非認知能力)が求められている。その基盤作りとして課題解決型学習を活用した研究実践を行う。					
学 年	1年	2年	3年	特別支援	合 計	教職員数 ※校長・教頭を含む
学 級 数	1	1	1	1	4	12名
児童生徒数	18名	23名	25名	2名	68名	

## 2 研究校の概要

本校校区は、食材の宝庫と自認する自然豊かな地である。その一方、昭和30年代には全校生徒が700人を超えていたが、本年度は68人であるなど、過疎化の課題と向き合っている地でもある。生徒は落ち着いた環境の下で学習や部活動に真面目に取り組むことができている。しかし、小・中学校ともに単学級のため、9年間にわたって人間関係が変わらずに生活をしており、新たな場面で力を発揮したり、話し合うことで問題を解決したり、トラブルを乗り越えたりする経験が少ない。

本事業3年目を迎え、連携企業より頂いた「新しい和食の在り方を創造し、和食文化を広める」というテーマの中に、今年度は「京丹波町」と絡めて和食を広めたいという考えで取組を進めた。美濃吉という「和食」の本物に触れる体験をしながら、京丹波町の食材など人的・物的資源を活用して和食文化を広めることで双方にとってよりよい関係を構築し、また自分たちの地域の良さを再認識する中で、自らの進路を主体的に捉え、自己実現の意識が高まることを期待した。また、これからの未来を創造し、積極的に行動できる人材の育成を目指して取組を進めた。

この取組を通じて、新たな課題に対して、既習の知識を活用しながら総合的に思考力・判断力・表現力を高めるとともに、生徒の学びへの意欲関心が増し、コミュニケーション能力や自尊感情が高まるかを検証しながら、認知能力と非認知能力の一体的な育成を目指したいと考える。

## 3 主な研究活動

5月31日(月) 2年生に本取組の趣旨説明を行う。

課題解決型学習(PBL)について説明するとともに、連携企業紹介とテーマ発表を行い、「和食」について学習を深める。

6月14日(月) 各班で和食の現状を把握し、テーマを決めて仮説を立てる。

和食の現状を調べ、各班に分かれて「新しい和食を創造して広めるための仮説」を立てる。

9月17日(金) 外部講師講話：地元企業(瑞穂農林)創立時の話を聞く。

「広める」という取組を学ぶため、地元の名産「はたけしめじ」を広められた森田一三様に講演頂く。



## 9月21日（火）調べ学習①

各班で考えたテーマが課題解決につながるという根拠となる事柄等について調べ学習を行う。



## 11月15日（月）調べ学習②（フィールドワーク）

テーマに沿って、地域の人材、地域の施設に出向いて、課題解決につながる根拠となる事柄について情報を収集する。



## 11月22日（月）仮説検証 各班が現状を他の班に発表（報告）し、検証を行う。

各班ごとに課題解決となるアイデアを他の班に発表（報告）し、疑問点や矛盾点を出し合いながら検証を行う。

## 11月29日（月）仮説再検証

前時で出た疑問点を元に、再度班内で検証を行う。

## 12月6日（月）まとめ①

発表に向けて発表資料、原稿をまとめる。

## 12月13日（月）まとめ②

## 12月22日（水）発表会

「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」校内選考会を行う。



## 2月5日（土）瑞穂中学校「総合的な学習の時間発表会」

今年度の取組を他学年に発表する。

## 2月19日（土）きょうと明日へのチャレンジコンテスト参加（代表班）

代表として選出された班が「きょうと明日へのチャレンジコンテスト」に参加をする。（オンライン）



2月21日（月）RST 及びアンケート

本研究活動を通じて、本校生徒がどのような力を身につけたかを検証する材料として行う。

#### 4 今年度の研究の成果と検証

学校独自で作成したアンケート調査で、学びへの興味、関心、コミュニケーション能力、自尊感情の高まりなどの学び続けることに対する意欲の向上が見られた。

##### <学校独自アンケート調査の結果>

「とてもそう思う」「そう思う」（肯定的な意見）

	【事業前】	⇒	【事業後】（伸び率）
◆自分の考えを分かりやすく伝える工夫をしている	22%	⇒	65%（+43%）
◆総合的な学習の時間で学んだことを教科に 活かしている	0%	⇒	35%（+35%）
◆自分の考えを自信を持って発表できる	21%	⇒	55%（+34%）
◆自分の苦手なことに対して努力をしている	32%	⇒	65%（+33%）
◆諦めずに最後まで粘り強く取り組むことができる	27%	⇒	60%（+33%）
◆分からないことは「なぜ」「どうなっているのか」 など疑問を持つことが多い	43%	⇒	75%（+32%）
◆自分の力で調べたり、活動したりすることが好きだ	26%	⇒	55%（+29%）
◆周りの人に積極的に関わろうとしている	32%	⇒	55%（+23%）
◆課題に対して色々な考え方で解決方法を考えている	25%	⇒	45%（+20%）
◆相談をして何かを進めることは楽しい	31%	⇒	50%（+19%）
◆調べた情報は、2つ以上調べて、信頼性を考えている	22%	⇒	40%（+18%）
◆新しいことにチャレンジする気持ちがある	42%	⇒	60%（+18%）
◆人に対する話し方や聞き方に気を配り話をしている	53%	⇒	65%（+12%）
◆周りの人の生き方や仕事に関心を持っている	26%	⇒	35%（+9%）
◆目的に応じて必要な情報を調べている	83%	⇒	90%（+7%）

上記の資料は、本事業を開始する前と終了後に行ったアンケート結果を比較したものであり、すべての項目で肯定的な意見の伸びが見られた。

##### <研究の成果>

(1) 教科・領域での学びを、課題解決型学習を進める上での基礎・基盤と位置付け、主体的な学びを実現する授業改善を目指した。生徒は、相手に分かりやすく伝えるためには、自分の理解をさらに深め、また、より分かりやすい言葉で伝えることが大切であるということ意識して

取り組めており、本町の推進する「学びを育む京丹波町メソッド」の目指す言語活動を効果的に活用しながら、付けたい力を明確にした指導が着実に定着してきたことが感じられた。

- (2) 京都を代表する企業である「美濃吉」との連携、また、社会との接続をはかる中で、課題解決学習をすすめ、「認知能力」「非認知能力」を複合的に活用する学習を目指した。生徒は、課題に対して個別またはグループで解決策を考え、インターネットで検索をして得られる情報だけでなく、実体験や実際に人との関わりの中で調べたりする学習を進めた。生徒は、こうした学習の難しさを感じるとともに、その反面で、説得力のある根拠（エビデンス）の重要性、それらを見つけることの楽しさを感じることができた。さらに、他者との協働により新たな発見や相手に伝える力が身についた。
- (3) 3年生の時期を学びの汎用期として位置付け、地域とつながり、自ら学び、社会と関わり、本町の未来を担おうとする人材の育成、自らの進路を切り拓こうとする態度や実践力を培う学習を目指した。生徒は、難しい課題に対して「できない」と諦めるのではなく、「どうしたら解決できるか」と主体的に関わり合い、その過程を通じて自らの可能性を発揮しようと粘り強く取り組んだ。課題解決への意欲が高まり、自尊感情の高揚につながった。
- (4) 課題解決学習を効果的な学びとする上で、教科での学び、社会とつながり、生き方と結んだ学びを目指し、教科横断的な学び、地域と連携した学び、中・高・大連携のパートナースクール事業等を含むカリキュラムマネジメントを進めた。

## 5 今年度の課題

- ・総合的な学習の時間で学んだことを教科の学習に活かす点については、アンケートの結果にも表れているように、満足のいく結果まで至ることができなかった。各教科・領域を横断的に行うカリキュラムマネジメントについては、指導者側の課題設定や発問なども検討する余地があると考えられる。課題解決型学習の手法を生かしながら、今後更に検証を進める必要がある。
- ・リーディングスキルテストを経年比較する中で、課題解決の手法を考えたり、資料を読み込んだりするために必要な読解力の向上について検証を目指した。しかし、十分な検証には至らず、継続した取組を進める必要がある。
- ・探究的な学習では、「課題設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を繰り返すことにより自らの課題や考えが更新される。この過程を繰り返し、よりよいものにしていくには、時間数の調整や各教科との連携等が、次年度以降における課題である。

## 6 事業終了後の研究構想

- ・各教科や領域に探究的な学習を取り入れた教科横断的なカリキュラムマネジメントを更に進める。
- ・主体的に学びに向かう生徒の育成を目指した「学びを育む京丹波町メソッド」をベースにし、効果的な言語活動、学びあいの実現に向けた授業改善を更に進める。
- ・未来の担い手育成プログラム事業で培った「課題解決型学習」の手法を今後も継続して取り組み、生徒が社会に出たときに直面をするような「答え（正解）のない問い」に挑む上での基盤となる力として、認知能力と非認知能力の一体的な育成を目指す。